

## 28PA-am138

服薬中の授乳婦への薬剤指導の効果に関する後方視的調査

○井上 由佳梨<sup>1</sup>, 岸 里奈<sup>1</sup>, 宮川 泰宏<sup>1</sup>, 千崎 康司<sup>1</sup>, 山田 清文<sup>1</sup> (名大病院)

【目的】授乳婦は、新生児への悪影響を懸念して薬の服用に強い抵抗を感じることが多い。倫理的問題もあり、授乳中の服薬が児に与える影響についてはまだ十分なデータがない。一方で、豊富な栄養や免疫学的な利点など、母乳育児によるメリットは大きく、近年、自身の疾患治療のため服薬しながらも母乳育児を希望する母親が増加傾向にある。しかし、その希望に対する最適な薬学的介入の方法については十分に検討されていないのが現状である。今回、名古屋大学医学部附属病院(以下当院)で出産した患者の母乳育児に関する希望と介入の実態を調査することで、最適な薬学的介入の方法について検討を行った。

【方法】2016年10月1日～2017年9月30日の期間に服薬が理由で当院の周産期カンファレンス対象となった患者において、既往歴や出産歴、薬歴、母乳育児に対する希望および薬剤指導などについて電子カルテを用いて後方視的に調査した。

【結果】期間中に対象となった患者は31例であった。そのうち、精神科系疾患の合併症のある割合が20例/31例(64.5%)であった。介入時点で服薬を継続していたのは29例/31例(93.5%)であった。介入前の母乳希望については服用薬剤数が1剤で11例/14例(78.6%)、2剤で3例/5例(60.0%)、3剤以上で5例/12例(41.7%)であった。また断乳となったのは初産婦4例/19例(68.4%)、経産婦5例/12例(41.7%)であった。

【考察】精神科系疾患の合併症をもつ授乳婦の服用薬の種類は多岐にわたっており、薬剤師による正確で適切な情報収集が求められている。患者の希望や背景を考慮し、希望と現実に即した最適な介入が必要であり、介入によりインフォームドチョイスがなされることが大切である。